

【黒笹】

私は黒笹といいます。今は高知に移住して3年半たちました。家族がまだ若くて、子供が今中学2年生、奥さんが今45歳ぐらいですかね、20歳以上離れて、犯罪だと言われているんですけども。中村さんと同じ会社の、いじめられ役だったのかな、中村さんに。そういうポジションで、今、ある意味、本当に高知で第二の人生を、ハッピーリタイア天国なんですね、高知は。

高知で、高知の方たち相手にいろいろなところで、講演で呼ばれるんですけども、とにかく高知はハッピーリタイア天国で、本当に日本語の通じる外国ですよなんて言うと、高知の人は、そうか、俺たち外国人だったのかってとても喜んです

ね。高知の人って本当に脳天気だと思いますけれども、高知の人の脳は肯定脳と楽天脳ででき上がっていて、2つ合わせると脳天気ということなんですけれども、それを言ってもちっとも傷つかずに、そうか、俺たちは脳天気だったなみたいな、とてもいいところなんです。

なぜ釣りバカなのかは今から説明させていただきますけれども、実は小学館という出版社に就職しまして、東京生まれの東京育ちで、大学も東京だったものですから、そのまま東京の出版社に就職しまして、御存じなのは作品、かわりました。ゼロからやったのは『人間交差点』と『釣りバカ日誌』ですかね。『浮浪雲』はもう始まっていました。あと、『三丁目の夕日』もほぼ最初からやりました。そういう出版社で、漫画の専門編集者として入社をした。もちろんそれまでは漫画なんかは全然知らなかったんですけども、結果的に6年間ぐらいですかね、漫画にいたのは。こういう作品をつくりました。



その後、今度は『BE-PAL』という新しい雑誌が出るというので、アウトドア雑誌ですね、呼ばれまして、一番若い編集者として、たたかれつつ、雑誌編集者の修行をしまして、それからはずっと雑誌の編集部におりまして、その後、『ラピタ』という雑誌、これは、創刊は編集長でやりました。それから、その後、『edU』という家庭教育雑誌をつくりました。これも編集長でつくりまして、結局37年間、小学館にいたんですけども、創刊誌は3つ手がけたということで、大変に恵まれた編集者生活だったかなと思います。

●ハマちゃん 高知へ移住

これは過去の話なので。それで、3年半前にふらふらと高知に実は釣りがしたくて行って、皆さんみたいに何か地域の役に立とうとか、第2の人生をもっと輝くものにしようとか、そういう大それた考えは全くなく、密かに釣りだけをして過ごしたいと思って行ったら、高知新聞に見つかりまして、8月ぐらいだったかな、こういうふうに新聞に出ちゃいまして、「ハマちゃん 高知に移住」みたいな話で、大変にわかりやすいタイトルですよ。魅力的な自然、来る運命だったとか格好いいことを書かれちゃいまして、そうしたら、黒笹さん、編集者だから文章書けるでしょうという話になって、今度はいろいろ高知新聞に連載とかを書かなきゃいけなくなりまして、高知でひっそりと釣りだけをして暮らそうという人生が大いに狂ってしまったというところでございます。

●ハッピーリタイア天国 7つの理由

それで、そういう形で、今年で3年半になるんですけども、高知がハッピーリタイア天国だと思う7つの理由、まとめてみました。7つって非常に語呂がいいので。本当は100ぐらいあります。ただ、7つにまとめると、まず、高知は日本語が通じる外国である。外国以上ですね。国内マレーシア以上と僕は呼んでいますけれども。あんまり受けないな。僕らの世代で、外国移住で一番人気があるのはマレーシアなんです。



高知がハッピーリタイア天国だと思う 7つの理由

1. 高知は日本語が通じる外国。
2. 高知は野菜も肉も魚も安くておいしい。
生活コストも安い。(国内マレーシア移住)
3. 高知では田舎と都市が
程よい距離で配置されている。
4. 高知は土に近い小都市。
5. 高知にはシルバー世代に都合のいい
システムがたくさんある
6. 渋滞がない、行列がない
7. 3・11以降、高知の価値が急上昇している

2016/1/30

きれいだし、食べ物もおいしいし、比較的成本が安くて、奥さんも旦那さんもいろいろ楽しむメニューがあるということですね。ただ、高知も外国でございます。土佐弁というちょっと偏った言葉を話しますけれども、基本的に日本語でございます。

それから、これは大きいですね。高知は野菜も肉も魚も安くておいしいです。生活コストも、思っていたほどではないけれども安いんですね。この歳になると、野菜、肉、魚が安くておいしい、ものすごくアンチエイジング効果があります。これは非常に大きいです。基本的には毎日の生活を普通にやっていると、毎日長生きのスイッチを押しているということなので、これは大いに強いところですね。

それから、高知では、都市といっても大した都市じゃないんですよ。人口三十数万人の都市なんですけれども、一応都市機能はそろっております。それから、そこから、車じゃないですよ、自転車で30分も走れば良好な自然がたくさんございます。ほどよい距離で配置されている。都会と良好な自然が近くにあるというのは、これは世界の大都市の結構重要な部分で、例えばニューヨークだって車で1時間走れば本当にいい自然があります。高知とニューヨークは全然違いますけれども、人間が生活するにはこのコードって意外と重要なんです。

それから、高知は土に近い小都市である。土に近いということはどういうことかということ、あと20年も30年もたてば、当然僕も土の中に戻りますので、できるだけ土に近いところに住んでいたい。ちなみに、東京のこの丸の内は多分世界で一番土に遠い場所だと思います。人間が頭の中でつくったものでございますので。僕は60年東京に住んだので、もうこういうところはいいかげんにやめてほしい。基本的には東京を見限って高知に行くと。丸の内ですんなりと言うと石が飛んできそうですけれども、そういう僕の判断があって行きました。それから、高知にはシルバー世代に都合のいいシステムがたくさんございます。まず、朝起きるとご飯はつくらなくてもよろしい。喫茶店に行くとモーニングが必ずあります。これも朝7時ぐらいから、どんなに小さな喫茶店でもモーニングがありますので、シングルになっても、もちろん御夫婦でも、朝ご飯をつくらなくても済みます。ずるずると喫茶店で『釣りバカ日誌』なんか読んでいると、ランチの時間になりますので、これまたランチを食べて、だべっていると、3時ぐらいまではじっくりと時間が過ぎる。そんなに高くないですね。ワンコインで大体終わりますので。こういうことをいろいろ都合のいいシステムがたくさんあります。あと、僕の場合は後期高齢者専用防波堤というのが周囲にたくさんございますので、そこへ……。あまり受けないなあ。どうしてかということ、70歳ぐらいのお年寄りが毎日、必ず同じ場所において、座席が決まっておりますので、我々はいれないんですけれども、そういう防波堤がによきによきと海に向かって出ています。餌代は1日50円ぐらいですかね。そうすると、夕方のお魚はそれで十分釣れちゃうんですね。原始的なといえば原始的ですね。

それから、私、一番苦手なのは行列が大嫌いなんです。東京だと行列を見ると並ぶという癖があるらしいんですけれども、うちの奥さんなんかもそうなんです、僕は行列があると基本的に避けます。渋滞があっても避けます。わざと渋滞を避けて遠回りになったりするんですけれども、これがございませぬ。ラッシュアワーといっても、北京のような自転車のラッシュアワーがあるだけで、何とも素朴なところですよ。

それから、3.11以降、基本的に高知の価値が急上昇しているんです。なぜかということ、売っているものの後ろを見ても、基本的には高知のものしかないんですね。ということは、自動的に放射能フリーだということですね。これは高知の人が意外と気がついていないことですね。僕は密かに大きな声で言っておりますが。

●高知大学 ニューリーダー育成

高知には大都会のストレスがないですね。地下鉄がない。地下街がない。渋滞がない。行列がない。満員電車が。ディズニーランドがない。高級クラブがない。乗車拒否がない。デパートがない。このないない尽くしが、僕は全部苦手なので、これは大都会のストレスそのものですね。これ全部あるのが東京ですね。ですから、僕がいかに東京にいとストレスがかさむかということがおわかりになると思います。

高知には大都会のストレスがない

地下鉄がない
地下街がない
渋滞がない
行列がない
満員電車が
ない
ディズニーランドがない
高級クラブがない
乗車拒否がない
デパートがない

私が現在楽しんでいる2つの趣味。仕事は、一応書いてありますけれども、南国生活技術研究所という怪しい会社名の代表をやっておりまして、生活技術というのはお金がなくても豊かに生活する技術ということですね。これは私がつくった言葉で、インターネットで引いても私の会社しか出てきません。それからあと、今年の春から高知大学に新学部、地域協働学部というのができまして、これは地域をこれから引っ張っていく、地域創生の時代に、地域を引っ張っていくニューリーダーを養成しようという大変に志の高い学部で、そこで特任教授という格好いい名前なんですけど、要するに時給が3,600円の日雇いの教授でございますが、そこでいろいろやっておりまして、それが仕事なんですけど、これは趣味ですね。

お遍路と釣り。これが結構おもしろくて、お遍路、御存じですよ。四国八十八カ所霊場。去年が1,200年の節目だったんです。今年は1,201年目なんですけれども、歩いております。去年の4月から歩いて、今ちょうど1年ちょっとたって1,000キロぐらい歩きましたかね。大変に楽しくて、健康的で、こんな感じですね。これは涅槃のつもりなんですけれどもね。必ずいい景色ではこのポーズをすることにしていまして、僕、新聞で連載やっているんですけど、これが大変に人気がございます。

私が現在楽しんでいる
2つの趣味

お遍路
と
釣り

こんな感じです。いわゆる白装束の、白い衣装のお遍路ファッションをしないで、僕、『BE-PAL』だったものだから、基本的にはアウトドアのBE-PALファッションですね、後期の。それで、「お遍路ードプロジェクト」という、お遍路を次世代につなぐための新しい観光お遍路でもっと地域を活性化しようというプロジェクトを立ち上げたんですけれども、新聞で取り上げられまして、夕刊の一面ですよ。こういうふうに出してしまうと、もう逃げられなくなりまして、歩いているということですね。ハマちゃんですからね。黒ちゃんのはずなんですけれども。ハマちゃんなんです。



新聞の連載、これですね。これは第1回目です。これは高知新聞の記者が私と完全同行をして、毎日、前の日の歩きの記事が次の日の朝刊に出るとい、新聞では最速のシステムなんですけど、これをやってくれます。結構真面目な文章なんですけれども、ここに僕がちょこっとだけコメントを出すんですけど、これが大変に人気がありまして、このコメントだけ読んでいるという読者がたくさんいまして、うれしくて恥ずかしいんですけども、私はこの裏で、高知新聞のホームページで長々と、ものすごい長いこういうのをやっております。「釣りときどきお遍路」日記というのをやっています、今でもスマホでも何でも読めますので、検索していただくと、月に1週間ずつぐらい歩いていますので、毎日、だらだらと長い文を上げておりますので、ちょっと興味のある方は。それで、お遍路を楽しむコツは、こういうふうに言っています。1人ではなく2人で歩く。先を急がない。それから、1日20キロ以上歩かないとか、夜遍路もちゃんとやる。夜遍路というのは居酒屋めぐりということなんですけど。夜遍路ってまたインターネットで引くと僕のコラムしか出てまいりません。私の独壇場ですね。そういうことでお遍路を楽しんでおります。



それからもう1つは、これは単なる自慢の写真なんですけど、こういうのが幾らでも釣れるんですね。これはキビレチヌという南方系の黒ダイですね。こちらはスズキですよね。これはシロギズ釣りにいってスズキが釣れちゃったっていう高知らしいあれなんですけど。単なる釣り自慢ですよ。

それから、テレビの番組も持っております、30分の釣り番組、「釣りバク日誌」、べたなタイトルなんですけど、僕の友達の夢枕さんと2人で県内の釣り場を釣り霊場と勝手に決めて、現在、釣り霊場7番ぐらいまで行っていますかね。30分番組を4本作りました。この9月にまたもう1本作りますけど、これは結構人気あり



すいません、私のこれからの目標。「人生なんてパッと変わるさ」を高知で実践してみたいというのが私の志でございます。実はこれ、僕がつくった雑誌のタイトルです。『BE-PAL PRIMA CLASSE』という高級誌を『BE-PAL』でつくったんですけど、全く売れなかったですね。1年で休刊になっちゃいましたけど、その最後の休刊の号、「人生なんてパッと変わるさ」という捨てぜりふですね。私の捨てぜりふを特集のタイトルにしたという。とんでもない話ですよ。当然全く売れませんでしたけれども、ちょっと早過ぎたかなと。



● 一步を踏み出す

今、「人生なんてパッと変わるさ」という本を出せば、おっという感じでもうちょっと売れたんじゃないかなと思うんですけど、僕はいつもやるのが早過ぎまして、時期尚早な人生なんです。生き急がないように長生きしたいと思いますが、私のメッセージは、人生を変えるのは、思うほど難しくないぞと。何か素敵なことが待っているかもしれないと思えば、その一步を踏み出せるというのは僕の最近の口癖でございます。僕の場合、この素敵なことはお魚さんであったりとか、お遍路さんであったり、弘法大師さんだったりしているんですけども。